

規範の感性論

——ウィットゲンシュタインとメルロ＝ポンティにおける規範の現象学

Aesthetics of Norms: Phenomenology of Norms in Wittgenstein and Merleau-Ponty

田村 正資

TAMURA, Tadashi

はじめに

写真を撮るときの構図、机まわりの整頓、新しい家具の配置、髪の毛のセット、絵描きに文章の執筆、スポーツにおける身体の動き……。ごく日常的な場面で私たちは「なんかいい感じ」と満足するまで小さな試行錯誤を繰り返している。「しっくりくる」「ちょうどいい」「ピッタリ」。そういった感覚を達成の指標として、私たちはさまざまな活動に打ち込み、大抵のばあいはそれでうまくいく。つまり、感覚に導かれた私たちの行為は、その状況における適切な対応や対処になっている。それが適切な対応や対処であるのは、私たちが感覚にしたがって行ったことが、社会的な規則や作法に当てはまっていたり、活動の達成度を高めていたり、私たちの感情や思考を的確に表現していたりするからである。

しかしながら、私たちはその都度、なんらかの規則 (rule) や基準を思い浮かべ、それらと照らし合わせながらどう行為すべきかを判断し、実行に移しているわけではない。大抵のばあい、私たちは目の前の対象に没頭し、ただ取り組んでいるのであって、行為を導いているのはもっぱら「しっくりこない」「ヘンな感じ」といった感覚である。このような感覚をアテにして振る舞うとき、私たちは熟考しながら行為するときとは異なる仕方では社会的・文化的な規範 (norm) と関係を結んでいる。つまり、私たちは規範的なものを思考するのではなく感覚している。規範的な感覚に身を委ねることで、私たちは大概のことをうまくこなしており、それはしばしば関係する規則や基準をすべて数え上げながらじっくりと取り組む場合よりも高度な達成をとまなう。

だが、上記のような非反省的な行為のなかで私たちが規範と結ぶ関係はどのようなものであり、実のところ私たちは何をしているのだろうか。ここには、「規範の感性論」ともいうべき探究の領野が開かれている。本論では、この「規範の感性論」という主題に関する先行研究を検討し、そのうえでさらに発展的な議論の提示を試みる。

なお、本論では第三節で取り上げるメルロ＝ポンティ的な定義を採用し、「感覚」を単なる外部からの客観的な刺激の入力としてで

はなく、感情的な価値をともなった印象として論じる。また、そうした感覚を持つ能力のことを「感性」と呼び、規範を感覚することで環境への柔軟な対処を行う主体の特性についての議論を「規範の感性論」と名付けている。

第一節では、私たちの行為と言語化可能な規則の関係を扱う。当然のことながら、私たちは意識的に規則に従って行為することができる。意識的な行為を繰り返すうちに、規則は身体化されてやがて意識せずとも規則に適合した行為をすることができるようになることがある。このような場合に、非反省的に行われる規則適合的な行為は、学習された規則に支えられているのだと言えるかもしれない。だが、私たちは必ずしも言語化可能な規則にのみしたがって行為をしているわけではない。

第二節では、言語化されていない規範にしたがって私たちが行為をしているとき、その規範が私たちの経験のなかでどのように働いているのかを検討する。ウィトゲンシュタインは、私たちが「方向付けられた不満足」というかたちで規範を感覚することによって、規範的な行為へと導かれているのだと考えていた。Rietveldは、この規範性を私たちの身体的な在り方と結びつけて「状況付けられた規範性」と呼んでいる。

第三節では、ここまでに論じてきた感覚することのできる規範の本性を、私たちの身体の在り方という観点から論じたメルロ＝ポンティのテキストを解釈することによって明らかにする。そこでは新たに、規範が感性によってアクセスできるものであることの根拠をどこに求めるのか、という論点が浮かび上がる。

最後に、「規範の感性論」について以上の議論から明らかになった点と、今後解明されるべき課題を提示して本論を締めくくる。

1. 私たちの行為と言語化可能な規則の関係

まずは、私たちの活動と命題の形式で取り出すことのできる規則一般の関係について考えてみよう。Wrathall(2007)は、私たちが「規則にしたがっている」とき、実際には何が行われているのかを現象学的に検討している。規則について考えるとき、これまでの議論では「規則にしたがおう」とする意識的な作用を捉えようとするか(内在的・主観的説明)、私たちの行動の客観的な記述のうちに見出されるものとして規則やパターンを捉えようとするか(外在的・客観的説明)のいずれかの立場が選択されてきた。しかし、規則的な活動を現象学的なレベルから捉えなおしたとき、学習を経て内面化された規則をそれと意識することなく実行する「規則統治下の振舞い

(rule-governed behavior)」が見出される。内在的説明によつては、それが「意識経験」の範疇を逃れてしまうために適切に記述することができない。また、外在的説明においては、規則統治下の振る舞いはその都度の状況に固有の応答を達成するという創造的な側面を持つために、状況を超えた普遍的な形式で適切に記述することができない。したがって、私たちの行為のうちには、意識的に規則に従うこと (rule-following) でもなく、主体の振舞いの法則 (law) でもない、一定の規範性を持った「規則統治下の振舞い」という次元を見出すことができる。

「規則に従うこと (rule-following)」と「規則統治下にあること (rule-governed)」は、いずれも規則に適合するものではあるが、経験のレベルで互いに区別されなければならない (cf. Wrathall 2007:78)。このような分類によって、私たちは非意識的かつ非法則的な規範の経験の検討へと導かれることになる。

Wrathallはチェスプレイヤーを例に挙げて、非意識的でありながら規則に適合的な振る舞いについて検討している。チェスの初心者には自分のターンが回ってくるたびに、駒の動き方を頭のなかで反芻させなければプレイすることもおぼつかない。しかしながら、チェスに熟達したプレイヤーは、ゲームを成立させる構成的な規則にいちいち注意をはらうことなく、適切かつ高度なプレイをすることができる。言い換えれば、チェスの初心者は目の前にある板や塊を、動きを制約する空間としての「チェス盤」や、ルーク、ナイトなど固有の機能を持った「駒」として意識的に分類しマッピングしなければならないが、熟達したプレイヤーにとって、これらの板や塊は特に意識しなくともチェス盤や特定の駒としてあらかじめ分類された仕方で現前している (Wrathall 2007: 78)。もちろん、熟達したチェスプレイヤーに対抗するプレイを、膨大なマニュアルをいちいち参照することで実現することは可能である。実際に、そのような仕組みで高度なプレイを実現するソフトも存在する。そしてこの両者は、それが成功しているときには、客観的には同じ振舞いとして現れてくる。しかし、規則統治下のプレイヤーが住む世界は、すでに規則によって分節化された世界であり、それゆえ、その人物が意識的にしたがおうとしていなかったとしても、その行為それ自体が規則への応答になっている。

ここまでの議論を踏まえて行為の図式をかんたんにまとめれば、私たちの振る舞いは次のように分類することができるだろう。

- ① 単なる振舞い
- ② (たまたま) 規則に適合する単なる振舞い
- ③ 規則統治下にある振舞い

1 Wrathallがここで参照しているのは、サールが*The Construction of Social Reality* (1995)において展開した議論である (cf. Wrathall 2007: 79-81)。

2 もちろん、将棋や棋士のプレイヤーがこのような説明を行えることも、必須の条件とはいえないだろう。

④ 意識的に規則に従ってなされる、規則に適合する振る舞い

Wrathallが試みていたのは、②～④を適切に区別する理論の構築である。彼はいくつかの手法を挙げて、それらが②～④を適切に区別できないことを指摘している。たとえば、サールの説明¹では、②と③を区別することができず、内在主義的な説明は③と④の違い (熟達したプレイヤーの振舞い) を説明できず、外在主義的な説明は②と③および④の違い (規則の規範性) を説明できない。いずれも、③の位置付けに失敗してしまっている点が共通している。この点について、Wrathallは次のように述べている。

規則統治下にある行為は、規則が世界のうちに位置付けられていくことによってのみ可能なものとなっていく。サールは、世界のうちに規則が存在することによって、私たちのうちに、規則に統治されるような仕方では世界に応答する傾向性が生み出されるのだと認識していた点で正しかった。しかし、その傾向性は「精神-脳」の事実には還元されえない。むしろ、〔規則統治下にある行為の〕説明は、さらなる行為を呼び求めるものとしての、世界における規則の継続的な現前を扱わなければならない。(Wrathall 2007: 82)

サールが述べているように、私たちは明示された規則を、特定の状況に対する特定の反射を起動させるような身体の傾向性として内面化しているのだ、といえるかもしれない。しかし、それらが非反省的に進行したからといって、単なる因果的な関係に還元することはできない。というのも、将棋やチェスの棋士が好手を直観的に見抜くような場合には、彼らにそれが好手であることの論理的で納得できる説明を期待することができるからである。

だが、だからといってそのような行為全般が、そのときに意識されてはいないが、必要とあれば意識化可能な明示的規則に支えられているとは言い切れない。スポーツ選手の場合を考えてみよう。高レベルのプレイヤーのなかには、言語化する能力に長けているものもいるだろうが、ほかの人間にも理解できるかたちで動作を言語化しうることが必須の条件ではない²。もっと日常的な素人の所作、似合う服を選んだり、写真の構図を決めたり、落ちてくるものを受け止めたりといった振る舞いについてはどうだろうか。「似合っている」「キマっている」「ちょうどいいところに手を差し出す」といった判断やそれに向けた所作を私たちはスムーズにこなすことができるのにもかかわらず、そのときにしがっている規則の説明を求められたとしても、うまく応答することは困難である。このとき私た

ちは、自身の行為について反省的になったときでさえもいまだ明らかではないが、それでもなお行為を安定して成功へと導くなにかにしたがっていると言うほかないだろう。意識化可能な規則を欠いたこのような行為においても経験されている感覚を、本論では規範 (norm) の感覚と呼び表すことにする。すなわち、さきほど述べたような、理由や法則を明確に説明することはできないが、毎回同じような仕方で行うよう促してくる感覚が規範の感覚である。

規則と規範の違いを際立たせることになるもうひとつの論点は、それが感性的な満足をもたらすかどうか、というところにある。規則に照らして目の前の事象に対応するとき、私たちは必ずしもなんらかの(不)満足を感じるわけではない。規則に対しては、ごく中立的に淡々としたがうことができる。他方で、規範的な振る舞いは必ずなんらかの(不)満足を伴って行われることになる。適合的な行為であれば気持ちよさを、不適合的な行為になってしまったときにはなんらかの気持ち悪さを感じる。すなわち、規範とは、単に私たちを明示的な規則抜きに適合的な行為へと導くものではなく、感覚的な(不)満足によって私たちを適合的な行為へと導くものだということができる。

このように、意識化可能な規則を伴わない規範の感覚を認めることができるのであれば、私たちはこれらの規範的な活動を、規則にしたがった振る舞いの派生形態として位置づけるのではなく、別の仕方では考えなければならない。上述のように規則の存在を厳然たるものと考えるとき、Wrathallの分類は私たちにとって必ずしも魅力的なものではなくなってしまう。彼が考えようとしているのはあくまで「規則の現象学」であって、ここで考えようとしている「規範の現象学」がそこに入り込む余地はない。それゆえ、私たちはさきほどの分類になにかを付け加えなければならない。すなわち、④「意識的に規則に従ってなされる振る舞い」を背景とした③「規則統治下にある振る舞い」とは別に、④を前提とはしていないような「規範的な振る舞い」を論じなければならない。

2. 規範に対する感覚：「方向付けられた不満足」と「状況付けられた規範性」

本節では、これまでの議論を踏まえて、明示的な規則に裏打ちされていない、にもかかわらず規範的であるような振る舞いの経験について考察する。Rietveldは、私たちがその都度の状況において適切に遂行する即興の行為のうちに、「状況付けられた規範性 (situated normativity)」を見出している (cf. Rietveld 2004; 2008)。

3 このテキストの成立事情には注意を促しておかねばならない。序文でCyril Barretが述べるところによれば、このテキストは全編がウィトゲンシュタインによる講義を受けた学生の筆記録から構成されており、刊行に際してウィトゲンシュタイン自身の確認を受けたものではない。ところが、この講義がウィトゲンシュタインの他の著作においてはほとんど触れられていない主題を扱っているために、重要な資料として公開されたのである。

Rietveldの問題関心は、非反省的な行為の知的な側面を説明することにある。私たちは、反省的な能力に頼ることなく、反省的なされる行為と同等以上のパフォーマンスを発揮することができる。もしこのことが経験的に受け容れられるのであれば、それがいかにしてなのかを説明しなければならない。

非反省的行為はそれが非反省的であるがゆえに、明示的な理由に基づいた行為として説明することが難しい。しかしながら、それを因果的な作用のなかに還元してしまうこともできない。Rietveldによれば、そこで課題となるのは、非反省的な行為が社会的・文化的・歴史的な文脈をもった状況の評価 (appreciation) をともなっていることの説明である (Rietveld 2010: 202)。

私たちは意図せず「状況の評価」をつねに行っている。これは明瞭な分析ではなく、状況に対する感覚的な反応として現れている。その都度の状況を経験的に評価することによって、私たちは反省を要することなく、規範的に行為することができる (Rietveld 2004: 306)。

では、反省を介することなく私たちが規範的に振る舞うことを可能にしているところの感覚的な評価は、いったいどのように与えられているのだろうか。Rietveldはそれを論じる手がかりとして、ウィトゲンシュタインが1938年の夏に行った「美学講義」(Wittgenstein 1967)³を参照する。

ウィトゲンシュタインはこの「美学講義」のなかで、私たちの美的 (感性的) な判断と言語使用の関係について論じている。彼によれば、実生活のなかでひとびとが美的 (感性的) な判断を行っているときに使われる言葉は、「美しい」「きれい」といった美的形容詞よりもむしろ、「正しい」「間違いない」といった言葉に似ている。「美的判断について語らなくてはならないときに、そのような〔美的な〕言葉はまったく見当たらず、身振りのように用いられて複雑な活動をともなった言葉を見出すことになる、ということに私たちは気付くのである」(Wittgenstein 1967: 11/146-147)。

身振りのようになされる美的 (感性的) 判断において、私たちは「ちょうどいい (it fits)」「しっくりくる (it clicks)」といった、素朴であいまいさも残した感覚的な満足のかたちで状況の評価を行っている (Wittgenstein 1967: 19)。このような評価はポジティブな場合とネガティブな場合に分けられる。ポジティブな評価は、行為の成功と終了を意味する。そしてネガティブな評価は、目の前の状況に対するさらなる働きかけを私たちに促す。非反省的な行為の規範性を考えるときにより重要なのは、目の前の状況に対して私たちのさらなる働きかけを要請するネガティブな評価である。ウィトゲンシュタインは、私たちが状況を改善へと促すこのネガティブな評価

を、方向付けられた美的判断の一種として論じた。Rietveldは自らの議論のなかでこのネガティブな評価を「方向付けられた不満足」(cf. Rietveld 2004; 2008)として定式化している。

まずは、ウィトゲンシュタインがどのような題材を提供していたのかを見てみよう。彼は「仕立て屋」という状況設定のなかで、生地や洋服を選んでいくひとと生地を裁断する職人の事例について詳しく論じている。衣服にかかわる場面でひとは、シンプルな言葉と身振りによって状況を評価し、その状況の改善を試みる。関連する箇所をいくつか引用してみよう。

いい洋服の何たるかを知っている人が仕立て屋で洋服を試すとき、どういうことを言うか。「これならぴったりした丈だ。」「これは短すぎる。」「これはせますぎる。」コートが自分にぴったり合うとき、かれは嬉しそうな様子をするだろうが、是認のことはいかなる役割も演じていない。「これは短すぎる」の代りに、わたしは「見て！」と言うかも知れないし、「ぴったりだ」の代りに「そのままにしておいてくれ」と言うかも知れない。どのようにしてわたくしは洋服に対する自分の是認を示すのか。主としてそれをしばしば着ることによって、眺めたときそれが気に入ることによって、等々。(Wittgenstein 1967: 5/135-136)

あるひとが仕立て屋で無数の見本を調べながら、「いや、これは少しばかり暗すぎる。これは少しばかりけばけばしい。」などと言うとすれば、そのひとは生地を評価できるひとと呼ばれる。(Wittgenstein 1967: 7/139)

ウィトゲンシュタインが挙げるこれらの事例のなかで、ひとひとが使用する言葉はその美的(感性的)な判断の内実を明瞭に記述するものにはなっていない。それどころか、「○○すぎる」かそうでなければ「よろしい」といったきわめて二元的な判断しか行っていないようにすら見える。ところが、そうした一見したところ単純かつ曖昧な判断を行うひとこそがその道のエキスパートであるということがありうる。ウィトゲンシュタインは、これが逆説的な事態、つまりは適切な説明能力を持っていないがたまたまその道のセンスを持っていたような事例とは考えていない。彼は前述の引用に続けて、次のように述べている。

よき裁断師は〈長すぎる〉〈よろしい〉といったことば以外にどんなことばも使おうとしない。(Wittgenstein 1967: 7/140)

いくつもの複雑な軸を持った座標のなかに対象を細かく位置付けていくような繊細な判断よりもむしろ、「○○すぎる／よろしい」といった単純かつ曖昧なかたちで状況を評価できることこそが、エキスパートのエキスパートたる所以なのだと、彼は見なしている。

だが、相手が用いる言葉だけを見ても、そのひとが実際に評価できる人物なのかどうか、ということはわからない。エキスパートにおいて言葉は身振りと同じように用いられているのであり、それゆえ言葉だけを切り出すのではない仕方での振る舞いを記述する必要がある。

そのひとが評価できるひとであるということは、かれの発する感嘆詞によって示されるのではなくして、かれが選び、選定する等々のしかたによって示されるのである。[…]評価がいかなることのうちに成り立っているかを記述することは、むしろかしいばかりでなく不可能である。それがいかなることのうちに成り立つのかを記述するためには、その環境全体を記述しなくてはならないであろう。(Wittgenstein 1967: 7/139)

私たちは、ひとひとが優れて規範的な判断を行っているのを容易に知ることができる。しかしながら、そのような判断がその人物においていったいどのように成立し、経験されているのかを記述するためには、その人物の生とそれを取り巻く環境を総体として記述しなければならないのだとウィットゲンシュタインは述べている。これはつまり、評価が因果性や論理法則といった単純な定式に還元されるようなものではなく、その都度の状況に固有の性格を持っているということだ。

ここで重要なのは、状況の評価に際して、私たちが現実世界の微妙な差異を言語化しうるようなかたちで把握している必要はないという点である。つまり、私たちは対象の細かい差異を言葉にできる解像度で見て取るよりもさきに、方向づけられた満足／不満足といった感覚によって察知している。それは「ここがこうなっている」という仕方ではなく「○○すぎる」であるとか「なんかしっくりこない」といった仕方、それ以降の私の反応を方向づけている。ウィットゲンシュタインの議論の重要性は、私たちの行為を導いているように思われるこの規範を構成するものとして、感覚的な要素を指摘した点にある。

私たちの行為はウィットゲンシュタインが論じたような「方向付けられた不満足」によって、状況を改善するように導かれる。このとき、主体による状況への働きかけと主体の感覚的な満足とのあいだに体系的な一致が見られるとすれば、方向付けられた不満足は主体によ

る状況の評価として機能していると考えられる。状況を改善していくことというのは、自らが抱いた不満を取り除くように状況に働きかけていくことである。そして、主体がこの評価にしたがって状況を改善すべく働きかけていることは、主体の振る舞いをつうじて示されることとなる。

Rietveldは、感覚的な印象とそこから導かれる行為のあいだに見出される規範的な関係を「状況付けられた規範性」と呼び、言語的に分節化された論理にもとづいて意志決定を行う際に見られるような規範性からこれを区別することを試みている。というのも、方向付けられた不満足の事例において、言語化することのできる明示的で一般的な規則は、私たちの特定の行為を正当化したり促したりするような役割を果たしているとは思われないからである。

だとすれば、理由を与えてくれるような規範性から区別されたこの規範性はどのように特徴付けられるだろうか。それは状況を超えた一般的な定式に還元できるものではないのだから、私たちがア・プリオリに体現しているようなものではないだろう。Rietveldはこの状況付けられた規範性の根底に、メルロ＝ポンティが論じたような身体性を見出している。彼によれば、過去の経験の履歴によって独特の関心を持つ主体が或る状況を知覚したときに「適切な」振る舞いが引き起こされる。それは、ある関心のもとで知覚された対象や出来事が、状況を改善する身体的な志向と感情的な応答を同時に生み出すからである。「方向づけられた不満足」は、規範適合的なパフォーマンスの本質的な側面を成している。或る特定のタイプの感情は、熟慮なしにものごとを正すために不可欠なのである。それゆえ、状況付けられた規範性は、身体化された関心を前提としている (cf. Rietveld 2008: 993-995)。

Rietveldはこのように、状況付けられた規範性とメルロ＝ポンティ的な身体を結びつけて論じている。だが、彼によるメルロ＝ポンティを介した規範性の説明は不十分な議論に終わっている。そこで次節では、メルロ＝ポンティ研究の成果を踏まえながら、状況付けられた規範性を補足し、その本性をさらに解明するための論点を提示して本論を締めくくる。

3. 身体化された規範性の在り方：メルロ＝ポンティの知覚 - 行為論

ここまでの議論を振り返ろう。私たちは日常的に、自分がおかれた状況にうまく対応し、安定して行為を成功させることができる。そのような行為の経験のなかには、行為の成功条件についての規則

4 このような意味で、メルロ＝ポンティが肯定的に言及する場合の感覚はほとんど知覚と区別されていないようにも思われる。

5 音喜多もまた、Dreyfus and Taylorのこのような解釈を支持しながら、メルロ＝ポンティが論じるような知覚経験においてすでに作動している規範性が、言語的な信念形成や正当化において働く規範性を支えているのだと論じている (cf. 音喜多 2019: 11)。

や基準に一切注意をはらうことなく達成されるものも数多くある。そのなかにはさらに、「どうしてそのように振る舞うのか」と問いかけられたり、他のひとにやり方を教えようとしたりしても、そもそもはっきりとしたかたちで記述できない行為がある。むしろ、私たちの行為の多くはこのカテゴリーに属している。このカテゴリーの行為が、記述可能な規則に裏打ちされていないのだとすれば、いったいなにが行為を安定した成功へと導いているのか。ウィトゲンシュタインによれば、それは方向付けられた美的 (感性的) 判断であった。私たちは、行為を成功あるいは失敗へと導くために把握すべき環境の微妙な差異を、高い解像度で認識するのではなく、「こっちのほうがよりよい／悪い感じがする」という二元的な仕方で感覚している。感覚的な不満足というかたちでその都度の状況に応じて示される規範を、Rietveldは「状況付けられた規範」と定式化し、メルロ＝ポンティの身体論に依拠して説明することができると考えている。

これが、ここまでの議論の要約である。以下では、規範性というテーマに関連するメルロ＝ポンティのテキストと先行研究を紐解きながらRietveldの「状況付けられた規範性」の身体的な性格を裏付けつつ、メルロ＝ポンティがそれらの先行研究においても扱われていない領域まで踏み込んで規範性を特徴付けていることを指摘する。

まずは、メルロ＝ポンティが『知覚の現象学』のなかで感覚についてどのように論じていたかを確認しよう。彼にとって感覚とは、私たちの認識から独立に捉えられる客観的な刺激を受け取ることでなくても、対象が持つ客観的な性質をただそのまま把握することでもない。それは、なによりもまず私たちの身体にとって対象が持つ意義を告げ知らせるものである。その意味で、感覚は「つねに身体への指示を含んでいる」(Merleau-Ponty 1945: 79/104)。私たちが外界を観察するのではなく、一連の行為のなかで外界に働きかけるとき、感覚と身体との関わりは顕著なものとなる。山のなかで歩き疲れたときには倒木が座って休むことのできる場所として現れ、雨でぬかるんだ道を進むときには平べったい石が安定した足場として現れるように、メルロ＝ポンティにとって、感覚とは対象が私たちにとってどのように有意義であるか、そして、私たちが目の前に状況にどのように働きかければよいかを教えてくれる⁴。

Dreyfus and Taylorは、メルロ＝ポンティを解釈しながら、一連の行為をスムーズに行う主体は、感覚された緊張や不均衡を解消するように促されているのだと論じている⁵。

メルロ＝ポンティは、私たちがものごとに対処している最中にものごととどのように直接接触しているのかを一般的に記述している。そうした場面において、対処活動はその状況の感覚に

応答しながら安定して流れ続ける技能活動として必ず経験されている。そしてこの経験の一部には、対処活動がうまくいっているのかいないのかの感覚が含まれる。最適な〈身体・環境ゲシュタルト〉からのズレを感じると、最適な身体・環境関係に近づこうと活動が変化し、この「緊張」を和らげようとする。しかしこのとき、最終目標となる最適な〈身体・環境ゲシュタルト〉が主体の脳や心のなかで表象されている必要はない。人はただ、緊張や不均衡の感覚を少なくするように反応するように引き寄せられるだけである。(Dreyfus-Taylor 2015: 47-48/76-77)

私たちは、目の前の状況が自分たちの活動に最適な状態であるかどうかをつねに感じ取っている。その状況が最適な状態からズレていると感じた場合には、それを修正するように環境へと働きかける。私たちの身体は状況によって促され、それと意識することなく最適な状況をめがけて行為を継続する。このような身体をメルロ＝ポンティ自身は、「均衡へと向かうところの、体験され生きられた諸々の意義の全体」(Merleau-Ponty 1945: 190/259)と表現している⁶。

以上のように、メルロ＝ポンティにおいても私たちの行為を方向付ける規範的な力の感覚が指摘されており、またそれが身体と深い結びつきを持つものとして論じられている。ウィトゲンシュタインにおいては方向付けられた不満足とその解消と呼ばれていた事態が、メルロ＝ポンティにおいては最適な均衡状態からのズレを和らげようとする主体の非反省的な対処活動として描き出されている。つまり、Rietveldが「状況付けられた規範性」として論じていたものが、メルロ＝ポンティにおいては私たちに最適な均衡状態からのズレの感覚をもたらしような経験の規範性⁷として語られているということが明らかになった。

だが、メルロ＝ポンティにおける規範性が身体と環境の最適な均衡状態へと私たちを促すものであるという解釈は、誤りではないとしても、メルロ＝ポンティの強調点を十分に捉えたものにはなっていない。なぜなら、メルロ＝ポンティは私たちの行為がしかじかの規範にしたがう様子を記述することよりも、規範がどのように生じるかにより強い関心を向けていたからである。ここまでは私たちが規範をどのように感じ取り、そして感じられた規範がどのような働きを果たしているのかについて論じてきたが、最後に規範がどのように生成するのか、そもそも規範はどのように在るのかについて、メルロ＝ポンティの立場を明らかにすることによって本論を締めくくるとしよう。

メルロ＝ポンティは、対象が私たちにとって最適なかたちで現れ

6 『知覚の現象学』に先駆けた前著『行動の構造』では、フットボールの事例が挙げられている。そこでは、自然的な対象や私たちの生存に密着した意義だけではなく、フットボールのグラウンドとそこをボールがはみ出してしまふことという、人工的な対象と文化的な意義もまた、私たちの一連の行為を方向づける力を持つことが論じられている(cf. Merleau-Ponty 1942: 182-183/下巻 73)。

7 ここで取り上げたDreyfus-Taylorの解釈は、メルロ＝ポンティにおける規範性の働きや経験の様態に関わるものであった。それに対して、Kellyはメルロ＝ポンティにおける規範性の認識論的な側面を詳しく論じている(cf. Kelly 2004; 2007)。彼によれば、私たちが与えられた光景に満足するのかどうか(つまり、光景を変化させるような行為に促されるかどうか)は、そのパースペクティブが対象の本質を開示するような特徴を捉えているかどうかにかかっているとKellyは考える。たとえば、マグカップを眺めやるとき、取手が隠れる視点よりも取手が見える視点のほうがよりよいものであることがこの観点から説明される。つまり、対象の質的な特徴をどれだけ露わしているかによって、パースペクティブの「よさ」を定義することができる。こうしたKellyにおける規範性の議論とその批判すべき点については、別のところで詳しく論じたのでここでは取り上げない(cf. 田村 2018)。

8 “forme” は「ゲシュタルト心理学」のゲシュタルト (Gestalt) の仏語訳として用いられる語である。ここでは、ゲシュタルトと概ね交換可能な意味で用いられている。

てくることは「形態 (forme)」(Merleau-Ponty 1945: 88/118)⁸が与えられることであると言ひ換えている。それゆえ、形態は私たちの経験が目指すべき規範として、私たちが目の前の状況に働きかけるように促す。実際には、それは理想的な状態を表象し、そこへ向かうために計算された活動を行うという仕方ではなく、感じ取られた緊張やズレという不満を解消するように促されるうちに或る均衡状態へと導かれるという仕方で進行する。あらかじめ明確に表象された理念としての規範ではなく、「なにかしっくりこない」というズレの感覚を解消していったさきにある均衡状態としての規範を指摘したところにメルロ＝ポンティの洞察がある。それがDreyfus and Taylorの解釈であるが、他方で、メルロ＝ポンティはそのような解釈に収まらない仕方で形態＝規範について論じている。

「形態」が私たちの知覚において特権をもっているのは、それがある均衡状態を実現し、極大の問題を解決し、そしてカント的な意味で世界を可能ならしめるがゆえにではない。形態は世界の出現そのものであって、その可能性の制約ではない。それは規範の誕生であって、規範にしたがって実現されるのではない。(Merleau-Ponty 1945: 88/118)

メルロ＝ポンティによれば、私たちの知覚経験のなかで対象の最適な現れとしての形態が特権性を持つのは、あらかじめ定められたカント的な理性の法則として世界の現れ方を統御しているからでもない。不満が解消された均衡状態へと私たちを導くからでもない。そうではなく、形態＝規範の出現は、私たちが生きる世界の出現そのものだと考えられる限りで私たちの知覚経験において特権的なものである。

ここには三つの論点があり、またそれぞれの論点に対する態度も入り組んでいる。まずは、規範とカント的な理性の法則の関係から考えてみよう。上で引用した箇所直前で、形態の出現が「先在する理性の外部への展開ではない」(Merleau-Ponty 1945: 88/118)と述べていることから明らかなように、カント的な理性の法則が私たちの経験にさきかけて対象の最適な現れ方(形態)を規定している、という考えをメルロ＝ポンティは退けている。これは本論でこれまで検討してきた「規範の感性論」にも通底する考え方であろう。

次に、形態が特権的なのは、それが均衡状態の実現であるからではないという論点はどうだろうか。ここまでの議論から窺えるように、メルロ＝ポンティは形態が実現された均衡状態であって、私たちの行為をそこへと導いていく規範であること自体は認めている。したがって、彼がここで言わんとしているのは、形態＝規範の重要性が

均衡状態の実現に尽きるわけではないこと、そして最も重要な論点が他にあるということである。

最後に、形態＝規範の出現が世界の出現でもあるという論点について考えてみよう。筆者は、これがメルロ＝ポンティの規範性をめぐる議論のなかで最も重要な論点であり、ここまで検討してきた「規範の感性論」にはなかった視点を提供するものだと考えている。なぜなら、これまで検討してきた「規範の感性論」は、私たちが世界をどのように経験しており、それによってどのように行為へと促されているか、ということに照準しており、規範の本性については考えていなかったからである。そのような視点の違いは、ここまで取り上げてきた論者たちの「現象」に対する態度の違いに由来している。

メルロ＝ポンティ以前に検討してきた論者たちは、いずれも規範を世界に対するある種の解釈として捉えている。すなわち、しかじかの世界が私たちとは独立に存在し、それを私たちは私たちがの仕方では観察しているのだ、と。たしかに、メルロ＝ポンティが習慣や技能、身体の状態によって世界の見え方が変わってくると論じるときには、同じように経験的な現れ（現象）が世界の解釈であるというモデルを採用しているように見える。しかし、『知覚の現象学』において次のように述べるとき、彼は諸々の現象が与えられる現象の領野が、世界を私たちの心のなかに反映したものであるとする考えをはっきりと退け、むしろ現象の領野こそが私たちと世界の直接的な接触の場であると考えている。

この現象の領野とは、いわゆる「内的世界」のことではない。「現象」とは「意識の状態」もしくは「心的事実」ではない。
(Merleau-Ponty 1945: 84/112)

いっそう一般的にいうと、直接的なものという概念そのものが変わってしまったのである。もはや印象とか主観と一体をなす対象だとかが直接的なのではない。むしろ意味、構造、諸部分のおのづからなる整頓が、直接的なものなのである。
(Merleau-Ponty 1945: 85/113)

このように、メルロ＝ポンティは現象の領野における世界の現れとの接触が直接的なものであると考えている。現れが直接的なものであるということは、そこで経験されているものが私の心のなかではなく世界のなかに存在し、間主観的にアクセス可能なものである、ということだ。意味や構造といったもの、すなわち私たちの身体に対して有意義なものとしての形態＝規範もまた、現象の領野に現れると同時に世界のうちにも出現している。「形態」について述べら

れたさきの引用箇所は、このようにメルロ＝ポンティの「現象の領野」および「直接的なもの」についての考え方を踏まえることで理解することができる。

ここまで検討してきたメルロ＝ポンティの立場を採るとき、私たちが感覚によって規範にアクセスしているのだとすれば、その規範は世界のうちに存在しているということになる。さらに言えば、そのような規範はあらかじめ私たちの経験にさきがけて存在して私たちの向かう方向を定めてしまっているのではなく、私たちの経験とともに世界のなかに出現し、私たちを導いていくものである。このように特異な規範の実在論が、メルロ＝ポンティのなかに見出される。しかしながら、それは特異であるからといってそのまま退けてよいものではない。感性的なもののなかですでに規範が働いているのだと論じるとき、まさしく規範的なものが感性的なもののなかに入り込むことのできる根拠が問題になるのであって、メルロ＝ポンティはそれに対してひとつの解答を与えようとしているからである。

おわりに

本論では「規範の感性論」と題して、私たちの日常的かつ高度な振る舞いのうちに見出される規範性の在り方について論じてきた。規範的な振る舞いを考えるうえで当初モデルとしていたのは、規則をそのたびごとに頭に思い浮かべながらひとつひとつ試行を繰り返すようなところから、その規則を内面化して直観的に解決策を見取することができるようになる主体であった。ところが、私たちの日常的な行為は、そもそもそのようなかたちで習得した規則に支えられているものが中心となっているのではなく、自らの持っている運動技能や関心に基づいて構造化された世界との感情的な関わりに支えられたものが中心となっていることが明らかとなった。したがって、私たちは明示化可能な規則を背景として規範的な知覚を行っているのではなく、それよりも手前のレベルで規範的な知覚を行っているということになる。

規範的な振る舞いについての考察を始めたときに私たちがモデルとしていたのは、目の前に存在する対象に、もともとは備わっていなかった機能を付与するような構成的規則であった。チェス盤や駒は、それらの物理的な性質によってチェス盤や駒となっているのではなく、私たちがそのように扱うことを取り決めていることによってチェス盤や駒になっている。もしナイトの駒が欠けていたら、財布に入ったコインをナイトの代わりに使えばよいのであって、それらが事実としてなんであるかは、それらに付与される機能とは独立

に考えることができる。このことは、規則を内面化した主体にとっては規則を意識せずとも世界が規則的に分類されマッピングされた仕方で現れてくるのだと述べたとしても変わらない。これは言い換えれば、ある事実がどんな価値を持つのかは恣意的に決まるということでもある。

ところが、私たちの規範的な知覚・行為の在り方を考えるときには、そのようなかたちで事実と価値を独立に扱うことを許容しない。規則を内面化する以前から、世界はあらかじめ私たちを行為へと促す価値を持っているのであって、そこから価値中立的な事実だけを取り出すことはできない。ここに、私たちが規範的な仕方で関わり合う世界そのものの規範的な在り方を問う余地が生まれてくる。私たちはメルロ＝ポンティの規範性をめぐる考察を取り上げることで、そのような問いを導き出した。規範的な現れは、私たちが世界に当て嵌めた解釈にすぎないのか、それとも、規範が感性的に経験される限り、単なる解釈以上のものとして規範の存在論を考えなければいけないのか。私たちはこのように問う必要があるだろう。そして、もはや本論では扱う余地がないことを承知で風呂敷をひろげておくならば、『知覚の現象学』でこの問いを示唆したメルロ＝ポンティは、『見えるものと見えないもの』に代表される1950年代後半の思索のなかで、私たちが経験する現象の領野と世界のことをさらに深く論じている⁹。それゆえ、規範的な知覚・行為の議論を足場として固めたところで、私たちとつねになんらかの仕方で規範的な関わりを持つ世界の在り方を後期メルロ＝ポンティのテキストをもとに論じることができるのではないか、という展望を示して本論を締めくくることとしよう。

〈参考文献〉

- Dreyfus and Taylor (2015). *Retrieving Realism*. Cambridge: Harvard University Press. [邦訳:『実在論を立て直す』村田純一監訳、法政大学出版局、2018年]
- Kelly, S. D. (2004). “Seeing Things in Merleau-Ponty,” Carman, T. (ed.), *The Cambridge Companion to Merleau-Ponty*. Cambridge: Cambridge University Press, 74-110.
- Kelly, S. D. (2007), “What Do We See (When We do)?,” Baldwin, T. (ed.), *Reading Merleau-Ponty*, London: Routledge, 23-43.
- Merleau-Ponty, M. (1942). *La structure du comportement*. Paris: P.U.F. [邦訳:『行動の構造』(上下巻) 滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、2014年]
- Merleau-Ponty, M. (1945). *Phénoménologie de la perception*, Paris: Gallimard [引用のページ番号は二〇〇五年以降の版に対応]. [邦

9 『見えるものと見えないもの』において、メルロ＝ポンティは世界の存在様態を「試問的な様態 (le mode interrogatif)」と表現することによって、本論の延長線上にある立場を示している (Merleau-Ponty 1964: 137)。

- 訳：『知覚の現象学』中島盛夫訳、法政大学出版局、1982年]
- Merleau-Ponty, M. (1964). *Le visible et l'invisible*, Paris: Gallimard, 1964.
- 音喜多信博 (2019). 「ドレイファス／テイラー『実在論を立て直す』から見たメルロ＝ポンティ現象学」, 『フィロソフィア・イワテ』50号, 3-17.
- Rietveld, E. (2004), “Wittgenstein’s Directed Discontent: Clarifying the Roles of Experience and Appreciation in Skillful Coping,” Marek and Reicher (eds.), *Experience and Analysis: Papers of the 27th International Wittgenstein Symposium*, 306-308.
- Rietveld, E. (2008). “Situated Normativity: The Normative Aspect of Embodied Cognition in Unreflective Action,” *Mind*, Vol. 117, 973-1001.
- 田村正資 (2018). 「メルロ＝ポンティにおける知覚経験の未規定性」, 『フランス哲学・思想研究』23号, 223-234.
- Wittgenstein, L. (1967). *Lectures and Conversations on Aesthetics, Psychology and Religious Belief*, Barrett, C. (ed.), Berkeley and Los Angeles: University of California Press. [邦訳：『ウィットゲンシュタイン全集 一〇』藤本隆志訳、大修館書店、1977年]
- Wrathall, M. (2007), “The Phenomenology of Social Rules,” Thomas Baldwin (ed.), *Reading Merleau-Ponty*, London: Routledge, 70-86.